第34回 横須賀市社会福祉審議会　高齢福祉専門分科会議事録

１．開催日時　　令和８年８月20日（木）午後２時から３時30分まで

２．開催場所　　横須賀市役所　消防局庁舎４階　災害対策本部室

３．出 席 者

【委　員】

福馬分科会会長、荒木委員、河西委員、鈴木委員、豊島委員、原委員、半澤委員、松尾委員

（欠席）沼田委員、星名委員

【事務局】

介護保険課	茂木課長、本松主査、石川係長、安藤係長、青井主任、荒木
福祉総務課	福本課長、若山課長補佐、菅野主任
地域福祉課	中島課長、西山課長補佐、新倉主査、竹内主査
健康増進課	竹内課長、田杭主査、田木主任

【傍聴者】３名

４．議　事

（１）前回会議等関連事項

①議事録について

議事（１）①について、前回議事録の修正意見がなかった旨を報告した。

（２）横須賀市高齢者保健福祉計画（第10期介護保険事業計画及び認知症施策推進計画を含む）案について

第４章　方針４　認知症との共生（認知症施策推進計画）

議事（２）について、資料１に基づいて事務局から説明を行った。

委　員：２点質問したい。

まず14ページ②もの忘れ相談の実施について、取組及び取組結果見込みでは、24回相談会を実施して、参加者は72人である。１回あたり３人しかいない。医師や職員の配置も必要だと思うので、事業の費用対効果がどうなのかと思う。専門医による個別相談なので、時間がかかり、３人しかできないのか。３人という結果の考え方について教えてほしい。

もう１点は、15ページの①の本文４～５段落目で、情報共有のために毎月「にこっとチーム員会議」を開催すること、年１回「にこっと会議」を開催することが書いてある。この取り組みによって取組結果につながるのであれば、他の事業のように、この部分を取組見込として表にしてもいいのではないか。

事務局：１点目、14ページの②もの忘れ相談については、認知症の専門医が長谷川式のテストを実施する。テスト実施前には本人の困り感や最近の症状、これまでの既往症などの聞き取りをする。どうしても専門医の先生が取れる時間と１人にかかる時間（40分）を考えると、３枠が限界のため、１回３人で設定している。

２点目、15ページ①認知症初期集中支援事業については、チーム員会議と新規取扱件数には連動性がない。新規相談があった際には、その都度委託先や直営チームによる医療機関や精神科の先生への相談をしている。それ以外に、地域包括支援センターの現状把握と連携しており、センターがチームにつなぐこともあるため、横の情報連携・共有のために定期会議を実施している。さらに、チームごとの情報共有のための会議を年１回実施している。

委　員：意見ではなくて質問だが、11ページ②認知機能の現状把握の取組について、集団による認知機能検査を受けたい人はどのようにすればよいか。

事務局：脳の健康度チェックという教室名で実施している。年に２回広報で募集しており、そちらに応募していただくことになるが、人気の教室なので、抽選で１回あたり30名が参加できる。他に、認知症予防のための運動とセットになっている教室もあり、そちらでも認知機能検査を実施している。

委　員：人気はとてもあるのだと思う。内容について詳しくはわからないが、例えば普段、市で実施している出前講座のような形でやれると、もっと受けたい人がいるのではないかと思う。

また、全体として、現行の計画（第９期計画）よりも、次期計画（第10期計画）は認知症関連の内容が増えている。今後認知症者が増加することに対する対応なのかと素直に感じた。

委　員：13ページ①認知症相談窓口の設置について、現行の計画では、地域包括支援センターの相談件数が3,000件になっているが、次期計画では2,500件と減っている。理由を聞きたい。

15ページの①認知症初期集中支援事業の実施についても、現行の計画より数値が減少している。

今後認知症の発症率は上がってくるし、今回新しい認知症観も出ているので、相談件数は増えてくる可能性はあるかと思うが、どうか。

事務局：地域包括支援センターの相談件数については、実績が減少しているため、実績を反映して減少させた。高齢者数の減少も原因かと考えている。ただし、今後は後期高齢者割合の増加やひとり暮らし高齢者の増加も踏まえて、経年では増加としているが、計画１年目としては現行の計画よりは微減する値とした。

認知症初期集中支援チームの件数についても、実績がかなり減少しているため、数字を下方修正した。理由としては、認知症初期集中支援チームの立ち上げがあった際は、認知症を診断できる医師が少なく、医療につながることができずに初期集中支援チームを使う人もいた。しかし最近は、市民も認知症を疑った場合は認知症の診断をできる先生にすぐにつながることも増えてきた。よって、チームで取り扱うケースが、本人に病識がなく、家族は認知症を疑っていて診察を受けさせたいが本人の拒否が強く、医療にも介護にもつながれないような困難ケースを扱うことが増えてきた。したがって、一般的な認知症の人の支援ではなく、支援が困難なケースの対応に絞られてきたため、件数が減少し、その実態に合わせて数字を見直した。

委　員：17ページの横須賀にこっとSOSネットワークの周知について、協力団体・企業一覧に、横須賀地区福祉施設連絡会も協力しているので、入れてほしい。

また、特別養護老人ホームで、横須賀市の認知症の身元不明者の高齢者保護の取り扱いに沿った形で、輪番制で身元不明の方の保護の協力もしている。それについても、計画に記載してほしい。

事務局：協力団体・企業一覧について、大変失礼した。時点が古いものをそのまま載せてしまっていたので、情報を修正する。

また、ご協力いただいている認知症身元不明者の受け入れについて、直近もご協力をいただいているところなので、ぜひとも記載を追加させていただきたい。どの部分に記載するかは事務局内で検討したい。

委　員：にこっとチームの名前の由来は何か。誰がにこっとするのか。

事務局：認知症の「に」高齢者の「こ」若年性の「等」で「にこっと」とした。

委　員：認知症カフェは、それぞれのカフェによって内容が違うとのことだが、具体的にはどのようなことをしているのか。

事務局：市内に25か所の認知症カフェがある。カフェごとに特色があり、主に本人や家族の相談をメインとしているところもあれば、レクリエーションが中心で、認知症という言葉もあまり出さずに、歌やゲームを楽しむところもある。また、喫茶店を活用し、一般客がいる中、一角で認知症カフェを開催しているところもある。

委　員：セミナーで聞いた話だが、資生堂では美容部員の人が施設を回り、認知症の人に化粧をする取り組みをしている。特に女性は、化粧により笑顔が出るという。このような取組をすると良いのではないかと思う。

事務局：先日、追浜の認知症カフェに出向いた際、介護美容をしている人が飛び込みで来ていた。その方は今施設で働いているのだけれども、地域の認知症の人や認知症の人を介護している家族が、家から出られず、美容に手が回らないということに目を向けている人がいるという話題が出ていた。

委　員：その取り組みは素晴らしいと思うが、資生堂はチームを作っている。市内全体で均一に実施できた方が良いと思うので、そのような取組を是非横須賀市でやってもらいたい。

事務局：貴重なご意見ありがとうございます。

委　員：認知症サポーター養成講座について、小学生から受けられるということだが、小学生が自分で講座に申し込むのか。

事務局：小学生が受講する場合、学童クラブや小学校のような集団単位で申し込み依頼を受けている。

委　員：依頼を受けて、出前トークのように出向いて実施するということか。

事務局：お見込のとおり。今年度も学童クラブから数件依頼を受けており、キャラバンメイトという認知症サポーター養成講座の講師が出向いて講座を実施している。

委　員：先日新聞で、小学生が認知症高齢者に声掛けしたことがきっかけで保護され、感謝状が贈られたという記事を読んだ。これからは小学生にも認知症を理解し、様子が気になる人には声をかけて助けてもらいたいと思うので、小学生にも認知症サポーター養成講座を広めてもらいたい。

事務局：貴重なご意見ありがとうございます。

会　長：７ページの認知症お役立ちBOOKについて、新しい認知症観に合わせて更新はするのか。

事務局：今は考えていないが、何か新しいことが出てきたら随時更新したいと考えている。

会　長：２ページの現状と課題について、課題の最後の段落で、本人参画の在り方については今後検討していき、新しい認知症観に基づいて施策を発展させていくということで、現在進行形かと思う。８～９ページの本人発信支援による本人参画の推進に向けた基盤づくりの位置づけだが、現行の計画（第９期計画）では、本人発信支援というキーワードが計画書56ページの「４　認知症に対する理解の促進」の中にあったので、本人発信による認知症の理解と言う文脈なのだと考えている。しかし今回は、本人参画の推進に向けた基盤づくりという記載のため、本人参画とは、本人が地域や政

策を作る主体となるという考え方だと思う。さらに、それが本人発信によるものだとあるので、理解の促進という目的とは次元が違うのではないかと思う。「９　理解の促進」の中に位置づけたことについて、意図を聞きたい。

また、先ほど認知症地域支援推進員が、認知症カフェで本人の意見を聞いていく話があった。本人参画の取り組みの一つとして、10ページに載せるのだと思う。形になるものを作るということで、丁寧に進めていると思う。ただ、基盤を作る際、どのように基盤が作られている人を評価するのか。成果指標には特に設定していない。徐々に作っていく考えがあるのはわかるが、今後どのように評価していくのか教えてほしい。

事務局：１点目について。本人参画は、計画策定の会議に参加していただくだけでなくて、日常生活の中で本人の意思や希望を丁寧に確認して支援や地域づくりに生かしていくという形があると考えている。本市においても、認知症のある人の声がきっかけで、認知症カフェの立ち上げにつながった例がある。こうした一人ひとりの日常の意思決定を支えるということも本人参画の重要な取組であると考えているので、今回実施する聞き取りや、本人が日ごろ感じていること、地域で暮らし続けるために必要な事、支援に対する思いなどを伺って計画に盛り込む予定となっている。まずは本人の声を市民や関係者に届けることが重要だと考えているため、計画内にコラムとして今回記載することとした。認知症の人がどのような思いで日々を過ごしているのかなどを本人の言葉で知っていただくことで、認知症への理解を市民の皆様に深めていただき、本人の視点に立った支援や地域づくりにつなげていきたいと考えている。また、計画に基づく取り組みや事業を検討する際の大切な視点として反映していきたいと考えている。ただ、現時点では計画の策定や評価を行うこのような会議の場に本人に直接参加してもらう仕組みがなかなかできておらず、本人の負担となる場合もあるので、形式的な会議への参加を求めるのではなく、本人が安心できる環境に十分配慮する必要があると考えている。今後は本人や家族との関係性も大切にしながら、本人同士が語り合える場などを通じて、本人とご家族と一緒に計画や取り組みについて考える機会を段階的に作っていきたいと考えている。

２点目の基盤づくりについて、我々も考え方がまとまっていないので、最終的な段階に向けて評価指標を作っていくなど、検討していきたい。

会　長：意義があるが難しい取り組みだと思うが、ぜひよろしくお願いしたい。

委　員：市の取り組みがこんなにいろいろあるのかと思った。他にもいろいろな団体や施設・病院などが活動していると思う。様々な活動について、市に報

告して統括するような仕組みがあった方がいいのか。
また、認知症サポーターの養成講座がたった５人でも集まれば実施できることや、認知機能検査が受けられること、専門外来の存在、認知症初期集中支援チームの存在など、これらはたくさんの人に知ってもらいたいのか、あまり広めてしまうと対応できなくなってしまうのか。そのあたりの兼ね合いをどう考えているのか。

事務局：おっしゃるとおり、横須賀市でもいろいろな政策を実施しているし、他でも様々な施策を実施されていることと思う。今回の計画は、横須賀市の施策を記載するものなので、他で実施している内容をすべて計画に盛り込むのは難しいが、計画に載せるかどうかではなく、関係機関とは情報交換をしながら、情報収集をしていくのは大切な視点だと思っている。
認知症サポーターの養成講座は、数多くやりたい気持ちはある。養成のためにはキャラバンメイトを派遣するが、今後はキャラバンメイトの養成にも力を入れ、キャラバンメイトが増えることで、様々な地区の小さなグループにも対応ができると考えている。したがって、我々の使命としては、受講者の増加だけでなく、講座を実施する人の養成にも力を入れていかなければならないと考えている。20代など、若い人でも興味を持ってくれている人はいるので、キャラバンメイトに加わってもらえるように進めていきたい。
初期集中支援チームについては、マンパワーの問題はあるが、まずは支援を必要としている人の把握が市としては重要だと考えている。チームとして支援に入れる数には限りがあるが、いっぱいだから受けられないということではなく、何か困ったことがあれば、ほっとかんにご相談くださいと周知をしている。認知症の相談窓口の認知度のアンケート結果がなかなか伸びず、我々も周知をしているつもりだが届いていない部分がまだあり、課題を感じているので、専門職の皆様のお力も借りながら、横須賀市に相談できるということを広めていきたいと考えている。

委　員：７ページの認知症お役立ちBOOKは令和９年度から新たに発行するものか。市民便利帳とは違うものか。

事務局：現在発行しているもので、様々な公共施設で配布している。市民便利帳とは違うものである。

委　員：認知症サポーター養成講座に出席するともらえるのか。

事務局：お見込のとおり。

会　長：それでは、本日の意見を受けて修正をする部分はあったが、それ以外の部分については、基本的には事務局案のとおり進めていくこととする。

５．その他

以上で議事がすべて終了したことを分科会会長が宣言した。

事務局から、閉会の挨拶をし、第34回高齢福祉専門分科会は閉会した。

※この議事録は委員等の要点筆記である。